

「一緒にカンファレンスしませんか」



私が画像診断医を目指した頃はMR診断の指導者は少なかったが、それでも早くから興味を持ったのが婦人科領域のMR診断である。なぜ興味をもったのか？ それは何よりも富樫かおり先生（京都大学医学部附属病院放射線診断科 現・教授）が執筆された「婦人科疾患のMRI診断（医学書院、1990年）」にある。この本を通して、婦人科領域の正常解剖から多くの疾患のMR所見を学び、私だけでなく、現在の婦人科領域の画像診断医の礎になったといっても過言ではない。その後、私はサブスペシャリティの道を選ばず、general radiologistという道を選んだが、現在も婦人科領域のMR診断はライフワークのひとつである。

そうこうしているうちに昨年の夏、放射線科医、産婦人科医、病理医が合同で開催する第19回JSAWI（Japanese Society for the Advancement of Women's Imaging）にて、京都大学医学部放射線診断科の木戸晶先生、近畿大学医学部産婦人科の鈴木彩子先生から松村謙臣教授が企画された今回の特集の編集に加わっていただけないかというお話をいただいた。もちろんこの“豪女*!?”に挟まれて、NOという返事はなかったが、それよりも富樫先生のもとで学び、診断や診療に携わってこられた先生方からのお誘いで、少しでも恩返しできればとの気持ちで承諾した。

その後、すぐに松村先生の企画書が届き、“産婦人科医にとって日常臨床に必要な画像診断”について詳しく、細部まで記載されており、この執筆に協力できることの喜びを感じた。その後、これをきっかけに産婦人科医、病理医とカンファレンスを行うようになった。カンファレンスを始めて早々に印象に残ったものに、松村先生が何気なしに発した一言がある。その一言とは、「腫瘍色」である。この特集で神戸大学の神田知紀先生も触れられているが、放射線科コミュニティ内で使われている言葉で、さかのぼれば京都大学放射線診断科医が流行らせた言葉である。そのひと言で婦人科領域の画像診断にかかわる縁や共通認識を感じ、現在、カンファレンスを通じ、昔の「婦人科疾患のMRI診断」を読み始めた頃の高揚感を感じている。

今回は、木戸先生とともに多くの婦人科画像診断のエキスパートの先生がたに執筆をお願いした。すべての原稿に目を通したが、どの原稿も松村先生が企画した日常臨床に即した素晴らしい内容で心より感謝申し上げる。私からのメッセージとして、この特集を通して、知識を増やすとともに、一人でも多くの産婦人科医、放射線科医が「一緒にカンファレンスしませんか」といえることが最高の産婦人科診療への一歩になりうるものと確信する。

近畿大学医学部放射線医学教室放射線診断学部門

松木 充

* 豪女とは、そんじょそこの男に負けない豪腕、豪快さを持ち合わせた女性のこと。